

土に眠る (5)

【5】

復活祭の休暇が終わって、また大学が始まったとき、ユミは自分を取り巻いている世界がすっかり変わって見えるのに驚いた。

単純に春になっただけ、とも言える。空は明るくなったし、空気はあの冬の辛辣さがウソみたいに柔らかくなった。でもそれだけじゃない。何かもっと大きな変化がある。

じゃあどう変わったのか、というと、それを説明するのはあまり簡単じゃない。たとえば朝、教室へ行く廊下の床が平らになったという感じ。もちろん、その前だって床がでこぼこしていたというわけじゃないのだけれど、でも、ヴァカンスの後でひさしぶりにそこを歩いたときに、ああ

なだらかに歩けるなあ、と思ったのだ。

部屋のドアのノブがすんなり回る。見慣れた窓や机が眼に映ると、体がふっと柔らかくなる。それで逆に、じつはこれまで長いこと、何かチクチクしたものを耐えて、それで体が固くなっていったということに気づいたのだった。身をこわばらせて、なんてよく言うけど、ユミの場合は喻えじゃない、ほんとうにこわばっていたらしい。そしてそのことに、やっと気がついたのだった。

日本人社会も少し様変わりした。

外交官の半田さんは四月からストラスブルに赴任して行った。こんどは学生ではなくて、総領事館とかで働くのだそうだ。まとめ役の半田さんがいなくなっただけで、日本人のグループは空中分解してしまわないかと思っただけで、実際はそんなことはなくて、結束がゆるくなったぶん、それぞれ自分の領域と行動ができて、一対一のつきあいができるようになった。

土に眠る (5)

商社マンの村山さんは友だちが増えて、すごく楽しそうになった。金髪の女子学生を連れあるいて、日本人に会うと得意そうに手を振った。相手が黒人だとみんなに悪く言われるのに、白人だと自慢げだなんて、おかしなはなしだとユミは思う。

ミヤちゃんからは、帰った直後、元気だという手紙が来た。でも、その後はナシノツブテ。手紙には赤ちゃんのこととは何も書いてなかったし、そのことにふれずにいると、手紙を書こうとしても奥歯にもものがはさまっているみたいで、それきり音信が絶えた。

イヌ君は相変わらず、というか、前よりいっそう知り合いが多くなったようだ。ここまでくれば一種の名士である。コックの夏目さんには、あのお正月以来一度も会うことがなかった。元気でレストランで働いているらしいのだけど、そのぶん外に出るゆとりはないし、ユミのほうも、高級レストランなんて行ってみたくても別の意味でゆとりが

なかった。

レストランには行けなかったけど、でも日々、何かしらすてきなことがある。

例えば道のマロニエが元気な葉を広げていった。マロニエの葉っぱの大きくなりようといったら、ほんとにめざましい。こんなにむくむく伸びると、樹も自分でなんかむずむずするんじゃないかな。朝と夕方で違う樹になったように感じたりして。

通りすがりの公園の茂みから、リラの小枝を一本折り取ってきた。それを空き瓶にさしておいたら、一晩で小さな蕾がみんな開いた。部屋中に香りが満ち満ちて、匂いに酔っぱらってしまいそう。たった一枝のリラの花の匂いが、あるじのユミよりもずっと大きな存在感だ。

そうして、あのワインのデギュスタシヨンの遠足がやってきた。はじめてアンドレに会った。彼がちよっと好きになつた。のだと思う。そのあと毎日がふわふわと楽しくて、

土に眠る (5)

ちよつと切なくて、どこかでアンドレに出くわさないかなあ、なんて考えていた。でも出逢うことはなかった。そんなに大きい街でもないのに、逢わないときは逢わない。それでよかったのかもしれない。なんかうれしかったから。そう、ダンス・パーティーまでは。

勉強だって、ちゃんとした。ま、そこそこ。日常のフランス語にもあまり苦労しなくなったし、クラスも短期の留学生の出入りはあったけど、顔見知りが多くなって、どちかといえればユミは古株になった。借りてきた猫みたいな気分はもうすっかりなくなつた。

そしていつのまにか五月。この時期のフランスはほんとうに素晴らしい。空が、空気が、花が。そして人も。

授業の帰りにまっすぐ部屋に戻るのもつたいたなくて、散歩がてらシュペール、つまりスーパーマーケットに買い物に行つたら、途中でイヌ君に会つた。

「ユミ、あしたの夜、ひま？　もし予定なかったら、ブー

ムに来てよ。女の子の人数が足りなくて困ってるの」

誘われた。ていうか頼まれた。ブームってダンスパーティーのこと。イヌ君の友だちの家で、少人数の集まりだから、男と女の人数がちゃんと揃っていないとまずいのだそう。イヌ君はいつか、そんな世話役っぽいことをするようになっていたようだ。

行ってみたら、みんな学生は学生だけど、ユミより年上の人たちばかりだった。ほとんどがフランス人のように見えたので、ユミは気後れしてイヌ君の後に隠れるようになっていた。

そしたら、何と！　少し遅れてアンドレがやってきたのだ。そういえば、彼もジユド関連のジンミヤクだったわけ。ユミはすごくうれしくて、部屋の向こうの隅にいるアンドレにそれとなく笑いかけた。

アンドレはなかなか気がついてくれなかったけど、そのうちユミに眼を止めて、「おっ！」というように眼を見開い

土に眠る (5)

て、にっこり笑った。ますますうれしかった。ダンスが始まって三曲目、アンドレはユミのところに来て踊りに誘ってくれた。曲が始まった。軽やかな早い曲だった。

アンドレはびっくりするほどダンスが上手だった。ユミもフランスに来てから、何かと踊る機会があった。ここではいつも会が盛り上がるのだれかが踊り出す。あのワインのドライブでも、ユミは踊らなかつたけど、庭で踊っている人がいた。だからユミも何度か踊ったことはあったけれど、でもアンドレみたいに上手な人とは踊ったことがなかった。体の重みが十分の一くらいになって、自分で思う前に足が出てしまう。気がつくともう回っているのだった。そして音楽が！ユミが音楽に合わせて踊っているのではなく、まるでユミの動きが音楽を生み出しているみたいなのに、体からみつく。そしてダンスをますます軽く弾ませるのだった。

「何ていう踊り？」踊りながらユミは聞いた。

「ワルツ」アンドレが言う。

ワルツですって？ワルツって、三拍子だと思っただの。これはとても早くて、ほとんど二拍子。最初の二拍がまるぶように連なって、三拍目がサーッと耳元で風を切る。草原を疾走している気分。

「気が遠くなりそう……」

ため息のように、ユミは言った。踊りが激しくて苦しかったからではなく、気が遠くなりそうなほどすてきだったから。

「ふふ」

アンドレが小さく笑った。彼もユミと踊っていて幸せそうだった。いっしょに踊ってみてはじめて分かる何かがあった。体と体が芯のところで結ばれて、一つになって踊っているようだった。

「ユミ、とても軽い。羽根のようだ」

土に眠る (5)

アンドレが耳元でささやいた。自分でもそう思った。自分の体が風に舞う羽根のようだった。

踊り終わったとき、ユミは完璧に幸せだった。あつというまに一曲が過ぎたけれども、たったそれだけのなにか、かぎりなく豊かなものがあるような気がした。

その日ユミは、もういちどアンドレと踊りたいと、ただそれだけを考えていた。でも、アンドレは二度とユミを誘ってはくれなかった。アンドレのそばに女の人がへばりついていて、ぜったいに彼をひとりになんかさせてくれなかったから。はじめは横に座ってしなだれかかっていたのだけれど、しまいにアンドレの膝の上ですっぽりと腰を下ろしてしまった。まるで、自分でアンドレの文鎮になったみたいに。

その人は、ワイン・ドライヴの時に唄をうたっては笑いころげていたフランスワーズだった。アンドレの膝に乗ったフランスワーズは、片腕を彼の首にかけ、上半身だけ向かい合うようなかたちで話したり、時には両腕を回して抱

きついたりしている。日本だったら、あんなこと、とても

恥ずかしいことだわ、ユミは憤然と考えた。

あまり他の人とは踊りたくない気分だったので、ナオミはイヌ君のそばにくっついていた。イヌ君も、あまりダンスは好きでないみたいだ。

「イヌ君、踊らないの？」と聞くと、

「うーん、そうでもないけど」はつきりしない口ぶり、

「おれのダンス、ジユド・スタイルだって笑うんだもん。そんなに腕を伸ばして相手をつかまえないで、もつと胸と胸をつけるのよだってさ。恥ずかしいじゃん、そんなの」

だれが笑ったのか知らないけど、それはたしかにありそうなことだ。ジユドのおかげで人気があるのだけど、ジユド・スタイルのダンスは、フランス女性にももてないのかもしれない。

「ユミちゃん、誘って悪かったかな？」

そばに寄ってきたユミのことを、ダンスが嫌いなのかと、

土に眠る (5)

イヌ君は気づかっているらしい。

「前はこういうとき、マダム・サキヤマに声をかけたんだけどさ。彼女、ダンスが好きだったんだよ。でもああいうことになってから、ダンスパーティーなんかには誘っても来なくなつたから。つうか、誘いづらくなつてさ」

「ああいうこと？」

「だんなさん、亡くなったでしょ？ あれ、ユミちゃん知らなかった？ そうか、誰もその話はしなかったのかあ。うん、サキヤマさんのだんなさん、亡くなったんだよ。サキヤマさんが日本に帰ろうとしてた矢先」

イヌ君は話しはじめた。サキヤマさんと、いつもと呼び方まで変えて、ちよつとまじめな表情だ。

「サキヤマさんはだんなさんを日本に残して、単身で留学してたんだよ。男が奥さん置いて単身赴任するっていうのは、まあある話だけど、でも奥さんがだんなさん残して留学するのって珍しいから、日本を出る前も、人にいろいろ

言われたらしい。でも、だんなさんはだいじょうぶだから行けって言ったんだって。

はじめ二年の予定で来てたのが研究の都合で三年になって、それが終わりに近づいた頃、六月だったかな、突然だんなさんが亡くなつたんだよ。交通事故だった」

ダンスパーティーのことはそっちのけで、二人は話し込んでいた。わざわざ男女同数にした会だったので、残りのパーティーナリングはうまくいっているようだった。

「彼女、取るものもとりあえず日本に帰つたんだ。そして一ヶ月後に戻ってきたんだけど、その時にはすっかりようすが変わっていた。ほとんど口をきかなくなつたし、それだけじゃなくて、なんていうのかなあ、表情を変えない人になつちやつたんだよ。わかるかな」

うん、わかる。つまり今みたいになつちやつたんだ。ユミが初めて逢ったときも、紹介されても、人の顔じつと見てるだけで、何にも言わないんだもん、怖かつたよ。頭お

土に眠る (5)

かしいのかと思った。ユミは、でもそうは言わず、だまっ
て頷いた。伊又君は、

「そうだよ。今でもまだ少しそんなふうだからね。でも
ずいぶん良くなってきたんだよ。前はみんな心配したんだ
よ。なんか起こるんじゃないかと思った。つまり…」

「つまり…、自殺、しちゃうとか？」

「まあね。だれもはつきりそうと口に出しては言わなかつ
たけど」

あ、誰も言わなかったことを、言っちゃった。ユミが内
心うろたえたのを伊又君はちらっと見て、

「身近にそういう人がいるのって、ちよっと辛いものなの
ね。だって、こんな少人数でいてさあ、べつに責任取るつ
ていうつもりはないし、取れるはずもないんだけど、でも
他に頼れる人がいるわけじゃないからね。家族も友だちも
日本にいて、いざという時の支えにはならないだろ」

それはほんと。ユミもしみじみわかる。

「で、パーティ何かあるときにはできるだけ引っぱり出
すようにして、ようすを見てたの。サキヤマさんはあまり
気がすまないようだったけど」

「ん、わかる。新年会するときもそんなふうだった」

「いやあ、あのときなんか、すっごく良くなってたんだよ、
あれでも。自分で料理つくってきたんじゃないか？
みんな、びっくりしてたんだよお」

それであんなに、おいしい、おいしいって誉めたわけ。

「日本に帰ったほうがよかったんじゃないの」

「ぼくたちもそう思ったよ。個人の問題だから他人が口出
しできることじゃないけどね。でも、はた迷惑だみたい
に言う人はいたな。恥ずかしいとか」

ミヤちゃんのジケンがふっとユミの頭をよぎった。まだ
ナオミがいない頃だけど、たぶん似たようなデイジョンの
日本人社会…。

「けど帰れない事情があったんだよ。てか、どうしても帰

土に眠る (5)

りたくなかったんだな、たぶん。だから日本のご両親も強く帰れとは言わなかったんだと思う」

「……」

「だんなさんが亡くなったのは自動車事故だったんだけど、そのとき女の人のいっしょだったんだって。事故の知らせで、サキヤマさんは大急ぎで日本へ帰った。ぼくたち、誰もそのこと知らなかった。言ってる暇もなかったんだろね。」

帰った時はもうお葬式の準備ができてたんだって。で、式が終わって、焼き場に行く車を待っていたときに、トイレへ行こうとした廊下の隅で、立ち話を聞いてしまったんだそうだ。

「心中だったんじゃないの?」
「さあ……。奥さん知ってるのかしら?」
「うん、どうだろう、フランスに行ってる、こんどのことで帰ってきたばかりだしねえ」

亡くなっただんなさんの高校時代の同級生の女の人們が、ひそひそ話していたんだ。それを聞いてサキヤマさん

は、帰ってきたとき、なんか変だと思っていたことが腑に落ちた。みんながなんか盗み見るような目つきでサキヤマさんを見て、すごくハラハラ気をつかっているみたいだった、ということがね」

「だんなさんを亡くしたので気づかっていたんじゃない?」

「それはそうなの。サキヤマさんもはじめはそう思ったんだって。でもね、彼女のほうでは、自分が夫を放り出して留学して、そのあいだにこんなことになったと思って、だんなさんの親族にたいしてすまないって気持ちもあったわけ。もともと留学に反対した人も多かったし。ところがその感じが逆で、なんか向こうが申し訳ないみたいな顔してるって思ったんだって。申し訳ない、いや、顔向けできないって感じ。おとなが自分で起こした事故だから、まわりの誰かれが悪いってもんじゃないし、それにしても」

「イヌ君はまるでマダム・サキヤマに成り代わったように頭を振っている。」

土に眠る (5)

「で、そのひそひそ話を聞いて、いろんなことのつじつまが合った気がしたんだ」

「どういうこと？」思わず興味津々の声になってしまう。「いやあ、どういうことって。だから、だんなさんが事故を起こしたとき、女の人といっしょだったということさ。そのことを、みんなサキヤマさんに隠してたんだな。ま、わざわざ言うことはないってことだったんだらうけど」

「その人と特別な関係だったの？ 恋人とか？」

「それがわからないんだよサキヤマさんにも。でも誰にも聞きようがないんだって。夫は女の人といっしょだったの、どういう関係だったのなんて、こっちから聞けるものじゃないわよって、サキヤマさん言ってたな。みんなが黙ってるのに。そうこうするうち、たしか聞いたはずの立ち話をほんとに聞いたのか、空耳で聞きまちがえたんじゃないのか、もしかしたら、そもそも立ち話なんてなかったのかも、って自分でもだんだん疑わしくなってきた。そして、

て、いつのまにかだんなさんとすごく遠くなってしまったこと、気がついたんだって。なぜかって、そんな状況のなかでも、いちばん見えなかったのが夫の心だったから、って」

夫婦って、そういうことがあるんだらうな、ユミは思う。それは遠く離れていても、いっしょに暮らしていても、同じなのかもしれない。だって、パパの気持ちが変わらないの。何を考えているのか、ぜんぜん見えないのよ。ママがつむいてそう言ったことがあったもの。近くににいるのに、パートナーの気持ちがあめなくなったほうが、もしかしたらもつとこわいかもしれない。

「サキヤマさんは、そのことについてどうとう誰にも質問できずに、日本からフランスに戻ってきてしまった。もちろん、日本に帰ったのは取るものも取りあえずって感じだったから、フランスに戻るのは当然なだけだし。でもそれからしばらくして、留学を延長して論文の勉強をつづけ

土に眠る (5)

たいつて、指導教官に申し出たんだ。もともとあともう少
しで完成しそうだから滞在を延ばしたらって先生から言わ
れてたんだって。でも、だんなさん残して来てるから、残
りは日本で完成するって断ってた」

大切な人を残して留学するって大変なんだ。やりたいこ
とを途中にして帰るといふことも。どっちも。ユミはふっ
とエクス・アンプロヴァンスにいる田上さんのことを考え
た。田上さんも、そういうことを考えたりしたのでろうか。
「マダム・サキヤマはね、延長の申請をするときになって、
もう一つ思い当たったことがあるんだって。教授がもう少
し延ばしなさいと言ってるって、だんなさんに手紙書いた
ら、必要なら留学延ばしてもかまわない、せっかくだ
からそうしたらって次の手紙で言ってきた。でも、もとも
と二年のつもりが三年になっただけで大変なことだってサ
キヤマさん思ってたから、これ以上延ばすつもりなんか
なかった。でもあれ、ほんとはどういうことだったんだらう。

私が日本に帰らないほうがいいと思っていたんじゃないか
しら。あれやこれや考えだすと、それまでぜんぜん気にし
ていなかったことや、ずっと昔の言葉のはしばしまで気に
なりはじめて、頭がおかしくなりそうだったって」

そんな思いを、ひとりで耐えたんだ、サキヤマさんは。
ナオミの心に柔らかい感情がこみあげてきた。自分でも思
いがけないことだった。正直いうと、それまでサキヤマさ
んという人が嫌いだった。高級なガクモンやって、いばっ
てるんだと思ってた。あの動かない表情に出くわすたびに、
高卒で留学なんて言ってる自分がみじめになった。

「そんなことまで話したの、イヌ君に。イヌ君とマダム・
サキヤマがそんなに親しいなんて知らなかったよ」

どっちかかっていふと仲が悪いのかと思ってたのだ、ほん
とうは。

「親しいっていうのは、ちよつと違うな。こんなところ
で、ほんとの家族やともだちと遠く離れて暮らしていると、

土に眠る (5)

どうしても誰かに気持ち吐き出さずにいられないことがあるんだよ。っていうか、どうしても人間相手に吐き出さなきゃいけないって時に、誰もいないんだよ。そういう時は、関係とか親しさなんか、問題にならないの。ただその時、なんかこう、気持ちの糸が一本つながらるかどうかなの。独り言に立ち会うみたいだね。だからって、ふだんから親しいとか、日本に帰ってからも仲良いつてのとは、また別なんだけど」

それはわかるような気がする。ミヤちゃんもユミにも、ちよっとそういうところがあった。二人はほんとにべったりだったけど、でもだからといって親友というような意味の親しさだったかどうかは、わからない。

「オレさあ、ずっと前にサキヤマさんに同じようなことで助けてもらったことがあるんだあ」

イヌ君の語調が変わって、照れくさいみたいに声が跳ね

上がった。

「まだフランスに来たばかりの時にさあ、オレ失恋しちゃったのよ。日本で好きだった子と手紙のやり取りしてて、でえ、オレの片思いだった分かったの。まだこっちに知り合いもなく、なんかその子のことが気持ちの支えみたいだったから、すんごくまいっちゃってさあ。そのときサキヤマさんに話聞いてもらったんだ。聞いてもらったっていうか、気がついていたら、なんかも吐き出してた。うん、ありゃゲロ吐くようなもんだな。ウツとききたら、もう抑えるまもなかった。もう泣きわめいてたよ」

そういうイヌ君、なんか想像できる、とユミは思う。「そんなことがあったから、サキヤマさんもオレには言いやすかったんだと思う。黙って聞いて、忘れてくれるって思ったんじゃないか。日本にいるときには考えられないことだけどさ」

イヌ君とユミは、それぞれの思いに浸りこんで、しばらく

土に眠る (5)

く黙っていた。

そこへジャンマリが近寄ってきて、「またダンゴーしてるのか？ 日本人はこれだからだめだなあ。社交性がない」

ふたりに人さし指を突き立てた。柔道サークルのリーダー格なのだけど、じつはジユドそのものにはあまり熱心ではない。それより、日本のことに詳しくなっておきたいのだ。将来は貿易関係に進んで、日本と取引したいというのが彼の夢だ。

「踊れ、踊れえ！」

ジャンマリがはやし立てるので、イヌ君とユミも椅子から立ち上がった。もうラストダンスに近く、他の人たちのパートナーシップは、すでに決まってしまったているようだった。イヌ君とユミは組んで踊った。イヌ君のダンスはたしかにジユド・スタイルだった。踊りながら、何度か

アンドレとすれちがった。ナオミと目が合ったとき、アンドレはちよとすまなそうな目をした。ような気がした。ユミは思わず冷たい顔をして、でもすぐあとで後悔した。